

改訂闘争 56.10 をかちとった前進の要員要求の事業の要員



81.9.26

No. 854

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五ノ六(公衆)四三二二七二〇七

木原線廃止反対・検修民託化阻止・反合運転保安闘争を軸に、35万人体制攻撃を粉碎しよう



今回の五六・一〇ダイ「改」にたいする国鉄当局の狙いは、千葉・津田沼間快速・緩行分離運転に伴う業増を最少限の要員増で乗り切る、燃料列車の昼間帯移行をもって佐倉・成田の要員減を計る、新茂原ヤードの開設に伴う運転以外の作業の外託化(工事遅延のため十二月に先送り)等、三五万人体制の一環としての合理化攻撃であった。勤労千葉は三五万人体制攻撃粉碎の立場から、職場要求をほりおこし「九・九反処分抗議減産闘争」「三六協定破棄」を結合しつつ闘いを組織し、要員要求の前進をかちとってきた。これは反合・三里塚を基軸に闘う運動路線と闘う組織体制によってかちとられた成果である。

かちとった要員増

五六・一〇ダイ「改」闘争で獲得した成果は、ひとつには、要員削減と労働強化の攻撃に歯ドメをかけ管内総体での大巾な要員増をかちとったことである。具体的には、①、津田沼電車区乗務員作業二、予備一増、②、千葉運転区乗務員作業一、予備一増と、津田沼駅ホーム予備一徹体制の設置、③、幕張電車区の通電廃止に伴う構内運転士削減の撤回と検修要員の増、④、佐倉機関区乗務員作業一と予備一名増、⑤、津田沼電車区乗務員の遠距離通勤者の解消と、運転保安確立の視点からの懸案事項であった快速仕業の千葉運転区への仕業移管、⑥、快速十五両貫通化等々である。

ふたつには、木原線廃止攻撃にたいする動労「本部」派の完全沈黙、木原線廃止への全面屈服、反対運動総体のカンパニア的取組みという不充分性を克服し、三五万人体制攻撃の軸に木原線廃止反対闘争を位置付け、「接続改善」と「専用ホーム設置」要求をもって、国鉄当局を追い詰めた政治焦点化し今後の闘いの展望を切り拓いたことである。

激化する三五万人体制攻撃を粉碎しよう

五六・一〇ダイ「改」闘争は、三五万人体制攻撃下にあつて着実な成果をかちとってきた。われわれは、この成果をかちとった核心こそ、八一・三ジェット闘争をうち抜いた組織力・闘争力の堅持・発展にあることをはっきりと確認し、三五万人体制攻撃粉碎の闘いに引き継がれていかなければならぬ。

九月二一日、国鉄当局は各組合に「昭和六〇年

までに国鉄経営の健全化を確立する」ための「経営改善計画」を提示してきた。その内容は、国鉄業務全般にわたる徹底した外注化と労働強化による、要員合理化のみを追求したものである。しかも「五五年度国鉄監査報告」にもとづく「赤字の増大」「貨物部門の落ち込み」を理由に、当初計画よりも三五万人体制合理化の進行を早めるといふものである。

この三五万人体制攻撃にたいして早急に反撃の体制を組むことが、いま国鉄労働者に問われている。しかし、この間の国・動労中央の三五万人体制攻撃にたいする対応は、国鉄当局の「赤字」宣伝に屈服したりえで「構造問題」を行・財政上の措置を求める」という国鉄当局との同一のレベルでの発想をもって「補助金獲得運動」に陥り、職場・生産点からの闘いの活性化を押しさえこむ役割をはたしている。とりわけ動労「本部」反動分子は、武操合理化屈服にはじまり「貨物安定宣言」「大胆な妥協路線」、乗務員運用合理化率先協力とつきつぎに合理化の尖兵としての役割をはたしてきた。

しかも、今日に至っては、「国鉄の営業政策への積極的提言」を行うとまで恥知らずにも公言し、国鉄当局の側にたつた企業防衛主義に積極的に関与し、セクト的延命にきゅうきゅうとしているのだ。

このような合理化の尖兵・「本部」反動分子の掃なくして、三五万人体制合理化粉碎闘争の前進はない。「本部」反動分子・土屋粹一派を掃し、一〇・一一三里塚に総決起し、木原線廃止反対・検修民託化阻止・反合運転保安闘争を軸に三五万人体制攻撃を粉碎しよう。